

朝日大学留学生別科 生活実態調査

Research of actual life situation
Asahi University Japanese Language and Culture Course

要旨

本稿では、朝日大学留学生別科に在籍する留学生の生活実態についての調査を報告する。主に住環境やアルバイト、そして経済状況などを中心に質問した。さらにアンケートでわかりにくい部分に関しては、数人の留学生に調査結果を提示しながら、詳細な事情や意見・感想をインタビューで聞き取った。また2014年度後期に行った調査と比較し、朝日大学留学生別科の学生の生活事情の経年変化を調べた。その結果から見えてきたのは、既に朝日大学に進学した親戚や知人（先輩）の影響がであった。（調査報告）

キーワード：朝日大学留学生別科 ベトナム人留学生 住環境、アルバイト、金銭事情

1. 調査の背景

ベトナム人留学生の増加と進学問題

2017年もベトナム人留学生の増加は続いている。昨年に引き続き、出身国別外国人留学生数は、中国に次いで2位であり、増減率も昨年(38.4%)より落ちたものの14.6%と増え続けている。30万人計画においては、2017年度も26万7042人と着実に伸びている。

しかし専修学校や日本語学校などの教育機関の伸びが著しいのに対して、大学進学する留学生数は緩やかにしか伸びていない。文部科学省の調査によると、日本語学校での国籍別は中国人24%、韓国人14%に対してベトナム人は47%と半数近くを占めている。そして専修学校では中国人韓国人が共に13%に対して、ベトナム人は33%となっている。この結果から、日本語を学びに来日するベトナム人留学生は増加しているが、その多くは専修学校に進学していることがわかる。

	在籍段階別留学生数	増減率
大学院	46,373人	2,895人(6.7%)増
大学(学部)	77,546人	5,317人(7.4%)増
短期大学	1,915人	385人(25.2%)増
高等専門学校	559人	5人(0.9%)減
専修学校(専門課程)	58,771人	8,536人(17.0%)増
準備教育課程	3,220人	134人(4.3%)増
日本語教育機関	78,658人	10,493人(15.4%)増

表1 在籍段階別留学生数

http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2017/index.html

国籍	日本語学校	専門学校
中国	24%	13%
韓国	12%	13%
ベトナム	47%	33%

表2 日本語学校・専門学校 在学生の国籍比率

その要因はいろいろ考えられる。ベトナム人留学生が非漢字圏であるために、従来の漢字圏対象の日本語学校では大学進学までの日本語指導が対応しきれていないという現実がある。さらに、母国との物価の差が激しくて進学費用を捻出することが難しい学生の存在もある。むしろ留学生のアルバイト月収が母国の両親の月収を超えてしまうため、来日直後からアルバイトのお金を母国に送金し勉学よりもアルバイト中心の生活になってしまう留学生も少なくない。

このような事例は30年前から国籍関係なく存在していたが、近年、製造業や飲食店・コンビニなどのサービス業における人手不足による外国人雇用の増大が、さらに拍車をかけている。実際、日本語学校入学当初から専門学校進学や就職を希望するベトナム人留学生も増えているという。(日本語学校関係者談)

朝日大学留学生別科でも、別科修了後に就職する留学生がわずかであるが存在する。従来のイメージでは、成績、出席不良の学生が進学以外の進路として模索する形であったが、近年は母国での大卒資格を持ち、かつ別科でも成績、出席率ともに優秀な学生が就職している。中には、別科の証明書を必要とせずに就職を決めた事例もあり、別科の存在意義が問われる事態にもなっている。

日本私立大学団体連合会日本語教育連絡協議会—朝日大学留学生別科の特徴

朝日大学留学生別科は、毎年11月に東京で行われる日本私立大学団体連合会主催の日本語教育連絡協議会に参加している。この会合は、日本全国に76ある私立大学留学生別科（現在募集停止中の別科を含む）を対象にした会合である。会合では毎年、文部科学省や日本学生支援機構による基調講演等を経て、分科会を行っている。別科長や日本語教員だけでなく募集や管理運営を担当する大学職員も参加しており、各自が抱える問題意識を分科会で提起し、他大学でどのように対応しているかといった情報交換の場となっている。

2017年度の会合も「変革における留学生別科」というテーマの下で、留学生の就職や外国人雇用に関する講演があり、分科会でも少数ではあるものの前述のような非漢字圏の留学生の就職事例が挙げられていた。このような留学生の行動や傾向が本学だけの問題かどうか、相対的な視点で把握することができるという点で、この会合は貴重な機会である。事例は限られているものの、予備教育機関としての留学生別科における今回の就職問題、大学進学率の低下は全国的な傾向にあるようである。

学歴主義が強い中国人や韓国人が多かった従来の留学生教育とは明らかに違い、また急速に増えていく外国人雇用と関連して、留学生別科は新たな課題に直面している。

この会合を通して痛感することは、これらの情報と気づきを基にもう少し戦略的に指導や別科運営に活用できないかということである。今後も増え続けるであろう非漢字圏の留学生を受け入れる予備教育的機関として、朝日大学の特徴や留学生の傾向を明確に把握し、長所を保持しつつ短所は改善修正していく。そのためにも、現在、在籍している学生たちの生活実態や彼らの本音を把握理解することが必要ではないだろうか。それが留学生の生活実態調査を開始した動機である。

2. 調査概要

① アンケート調査

実施目的：朝日大学留学生別科留学生の生活の様子を把握し、指導の参考にするために

主に通学や住居環境、アルバイトや仕送りなどの経済環境、学校に対する満足度、来日理由や進路目標、等を調査する。

実施日時：2017年12月12日（火曜日）（2017年度版）

2014年11月13日（水曜日）（2014年度版）

調査対象：2018年3月修了予定の留学生 20名（国籍：ベトナム17名、中国3名）

2015年3月修了の留学生 20名（国籍：ベトナム12名 中国8名）

（9月生はこの段階ではアルバイト禁止の時期なので今回は調査から外している）

調査方法：単純集計 項目に多少の文言の違いはあるが、2017年度と2014年度を比較することで朝日大学としての特徴と経年変化を見る。

※参考資料の調査は、筆者が赴任直後に指導するにあたり、学生の社会的ネットワークを把握するために予備調査として行ったものであり、共通する質問項目を抜粋している。

② インタビュー調査

実施目的：実際の生活について詳細に聞き、アンケート結果の妥当性を図るために行う。

実施日時：2018年2月7日（水曜日）

調査対象：2017年4月入学生（3月修了予定の留学生）5名

調査方法：座談会形式で行った。

アンケート調査結果を見せながら感想や意見、回答の詳細を述べてもらった。

※急遽インタビュー調査を入れたため選出基準として日本語会話に支障がない学生を選んだ

3. 調査結果

住環境

来日直後の外国生活に満足できるかどうかの条件の一つに「住環境」が挙げられる。生活環境の安全・安心とプライバシーを確保するという二つの目的を満たすためには、ある程度の広さと家賃が求められる。筆者の前任校（専門学校）は大都市圏にあり家賃が高かったため、どうしても一つの部屋を複数の学生で利用せざるを得ず、プライバシー環境が悪く、睡眠不足による遅刻や人間関係などのトラブルも少なくなかった。その点で、朝日大学留学生別科の住環境はどうかを調査した。

分析・考察

「同居人の有無」は3年前とあまり変わらない。2017年以降留学生別科では、瑞穂市穂積にあった二人部屋の寮から、瑞穂市只越にある一人部屋の寮に変えたが、それでも同居人を求める留学生が少なくない。

今回新たに設けた質問「部屋利用人数」に関しても、一人部屋より2人部屋が最も多い。また4人以上利用は推薦機関の寮であり、一つの部屋に二段ベッドが二つ用意されているという。入室人数も新入生が入ると満員になるが、いない場合は1、2人で利用するようになっていくという。同国人と一緒に生活することで、基本的な生活の安全確保と母語で相談できるという環境は、日本語が不十分な留学生にとって魅力的なようで、推薦機関出身以外の学生も、その寮を利用していることがわかった。

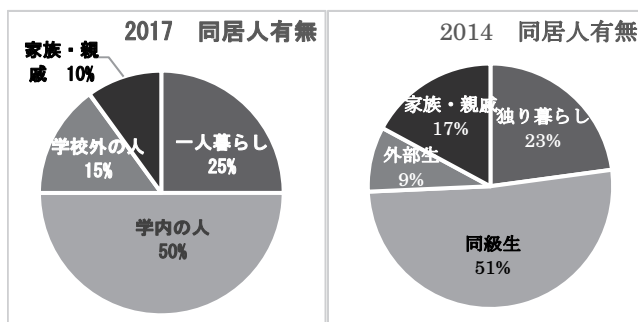


図1 同居人の有無（比較）

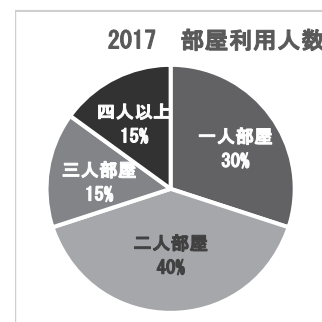


図2 部屋利用人数

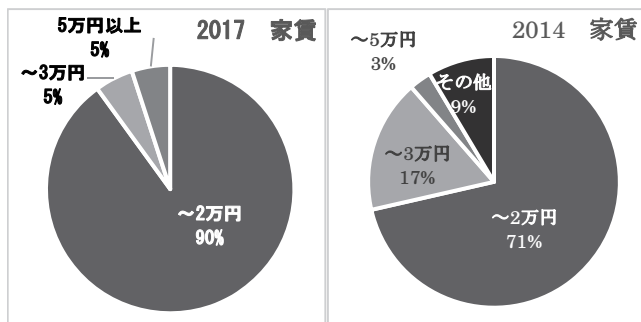


図3 家賃（比較）

「家賃」に関しては、以前の調査より一人当たり「2万円以下」という希望が強くなっている。おそらくベトナム人の口コミ情報が浸透したことにより相場が確定したのではないかと考える。インタビューでも「できれば2万円以上は家賃に費やしたくない」とのことであった。

過去に、大都市圏に進学を希

望しているながら受験から帰ってくると「やはり朝日大学に進学したい」と言って進路変更する例が2例あった。おそらく受験滞在中に泊まっていた友人の住環境が大きく影響していることも考えられる。朝日大学がある瑞穂市は、大都市に比べると田舎であるかもしれないが、安い家賃でプライバシーが確保できる住環境が整っている。それは朝日大学留学生別科の大きな利点ではないかと考える。

アルバイト

日本での留学生活の中で、日本語学習と同じぐらいを占めるのが、アルバイトである。アルバイトは留学生にとって学費や生活費を賄うものであると同時に、日本文化を理解体感する機会、あるいはコミュニケーション能力を養う機会でもある。その一方、母国との物価差からアルバイトに集中して勉学を疎かにしてしまう留学生も少なくない。そこで、来日して半年経った留学生が、どのようにアルバイトを見つけて、アルバイト先の人間とどういう関係を築いているかを調べる。

分析・考察

「時給」に関しては3年前より上がっている。これは岐阜県の最低賃金が上がったことによると思われる。(2018年2月現在800円)だが学生たちのインタビューによると、飲食店のアルバイトでは1000円を超えないという。夜勤の工場である時間を超えると1200円にもなる。

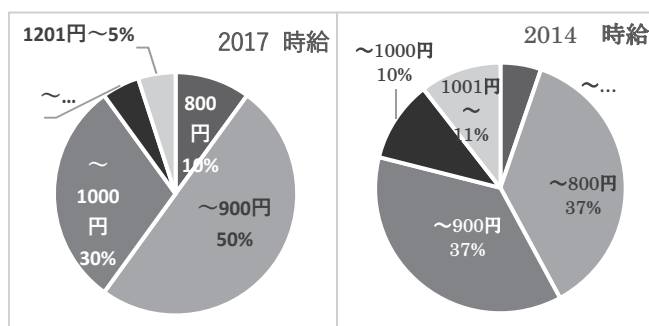


図4 アルバイト時給（比較）

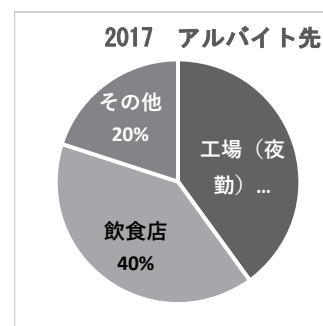


図5 アルバイト先

「アルバイト先」の工場は、主に「精肉工場」やコンビニの「弁当工場」のようである。半日商品をパック詰めしたり、野菜を切ったりする。「その他」については、夜勤の配送センターでの発送作業やスーパーの棚卸し作業などがある。学生が所属するアルバイトの中には派遣会社もあり、毎回業務が違うときもある。指定された駅に向かいそこからバスに乗って職場まで移動する。片道1時間近くの場合もあるそうである。

アルバイトを見つけた「きっかけ」は、2014年に比べて「友人紹介」が増えている。それだけ一部の業界では人手が足りないようである。

「出勤日数」は週3,4日が多かったが、留学生だけでなくアルバイト先も規定の「週28時間以内」には配慮しているようである。

留学生たちのアルバイトは、平日は基本的に一か所で行っているようだが、長期休暇になると今のアルバイトと夜勤のアルバイト（あるいは夜勤の学生は日勤の工場）を増やすとのことである。インタビューでは偶然「回転寿司店」のキッチンでアルバイトをしている学生がほとんどだったのだが、同じ系列店でも、地域によって時給や待遇が違うそうである。もちろん彼らは夜勤のアルバイトも経験しており、長期休暇に入ると再開するという。

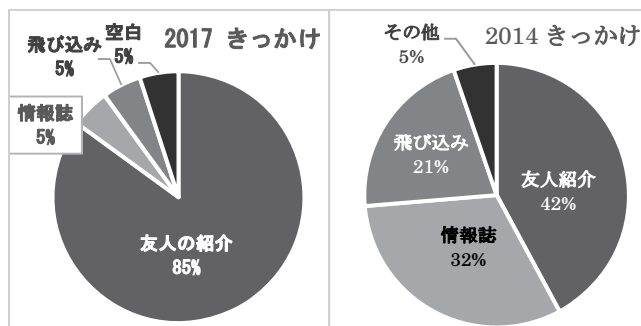


図6 アルバイト始めるきっかけ (比較)

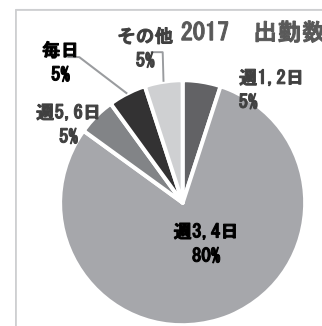


図7 出勤日数

実際、授業がある時期に夜勤のアルバイトをするとき、どのように生活をしているかを聞くと、授業終了後すぐに帰宅して仮眠をとり、出勤1時間前（だいたい9時か10時ごろ）に起きて食事をとり、アルバイトに向かう。バイト先によって違うが、朝は5時から7時に終わり、始発の電車に乗って自宅に戻り、シャワーを浴びて大学に向かうとのことである。「アルバイト中、眠くならないか」と聞くと、「アルバイトをしているときは眠くないが、終わった途端にすごく眠くなる」とのこと。毎日ではないので、アルバイトがない日は普通に夜に寝るが、アルバイト生活が続くと夜遅くまで眠れないときもある。そのようなスケジュールなので、夜勤のアルバイトがある日は「ほとんど自宅学習はできない」そうである。

「どちらのアルバイトがいい？」と聞くと、すべての学生が「時給は安いけど、生活時間が狂わないし、日本人との接点が多いから『店』がいい」と答えていた。もちろん夜勤の工場でも、年配の日本人と交流している留学生もいるが、あくまでも職場での会話であり職場を離れて連絡をとるほどではないようである。「日本人同僚とは、どんな話をするの？」と聞くと、生活情報に関する質問や漢字の読み方、あるいは「女性の話」だそうである。他愛のない会話ではあるが、内容から親密度が伺われる。

金銭事情

留学生の経済状況を知り、母国家族からの自立度を知ることができる。また貯金の有無を知ることで、金銭管理能力や中長期的な計画能力がわかる。他方、無計画な経済感覚は、留学生間の貸し借りが横行したり、短期間で学費を稼ごうと無理な生活を送ったりする等、トラブルや生活が乱れる危険が高くなる。もちろん、母国の家族の経済状態の変化も大きく関係するので、留学生のソーシャルネットワークには注視する必要がある。

分析・考察

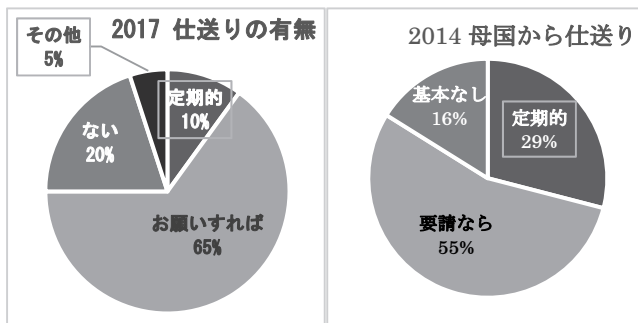


図8 仕送りの有無（比較）

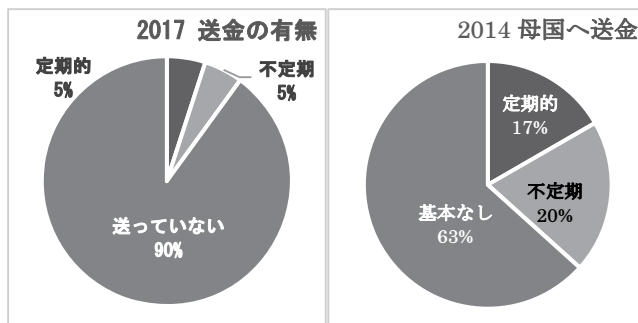


図9 母国送金の有無（比較）

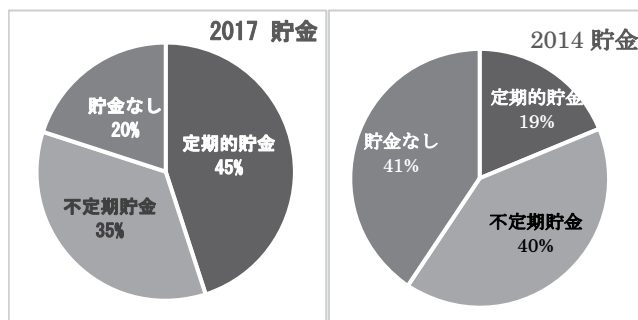


図10 貯金の有無（比較）

「(親からの) 仕送り」があるかどうかに関しては多少の比率は違うが、学生1, 2人の誤差なので、さほどの変化はないと思われる。インタビューで確認したところ、できるだけアルバイトで用意したかったが学費の不足分をお願いしたという学生や、生活費はアルバイトで賄うが学費は親が払うなど、それぞれであった。中には、親には一銭も送ってもらわず学費を用意したと言っていた学生も、実は「不足分を友人に借りた」とのことだった。やはり、アルバイト料で学費全額を支払うというのは、学生にとって大変のようである。

「送金」に関しては3年前と著しく変わっている。学生たちも「今は送れない。でも大学を卒業したら絶対送る」と答えていた。参考までに2011年度に勤務していた専門学校での調査では、「定期的・不定期的」を含めて68%の学生が母国に送金していた。これは、時代の変化なのか、朝日大学留学生別科の特徴なのか、非常に興味深い。

逆に「送金」がない分、「貯金」は増えている。前述のようにできるだけ親に負担をかけないため

に貯金をしているようである。その「貯金」が前述の友人お金の貸し借りにつながっている可能性がある。学生とお金のお話をするのは難しい。だが、さほど親しくない人物からお金を借

りたために、頼まれた仕事を断れず違法なアルバイトや密輸に加担させられてしまう学生の話も聞く。金銭の貸し借りは身内だけに留まらせるためにも、留学生たちの社会的ネットワークの把握はある程度必要だと考える。

朝日大学留学生別科を選んだ理由

最後は、学生が朝日大学留学生別科を選んだ理由である。全国に多数ある予備教育機関の中から、なぜ朝日大学を選んだのか。その選択理由が朝日大学留学生別科の特徴を示す一つの鍵だと考える。

分析・考察

「来日動機」は、留学生本人が「日本に行きたい」という動機が先にあったのか、あるいは様々な要因や縁があって「日本に来ることになった」のかという問いである。前述の前任校では就労を目的に親に留学を強く勧められて留学したというケースもあったからである。

3年前に比べて「周囲の勧め」が増えている。インタビューで聞いたところ、「(岐阜に住んでいた兄弟が)朝日大学に入ったらいいと勧められた」や「朝日大学に在籍したいとこの紹介で来た」などの理由がほとんどであった。本人自身も「日本に留学してみたい」という思いはあったが、予め環境が整っていたから、というのが正直なところだろう。中には「ビザが下りなかったら警察官になる学校へ行くつもりだった」などと第二進路が既に用意されていた学生もいた。

2017年度今回さらに詳細に「朝日大学を選んだ理由」という質問を設けたところ、やはり半分近くの留学生は「既に朝日大学に知人がいたため朝日大学に決めた」のである。この結果は、今までの調査結果と非常に合致する。住環境に関する情報やアルバイトに関しても、既に岐阜県や朝日大学に知人から得ていたためである。

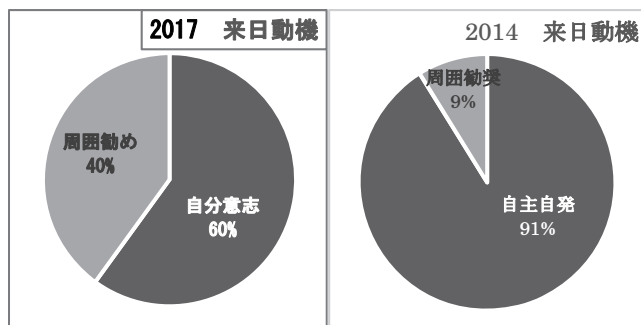


図 11 来日動機 (比較)

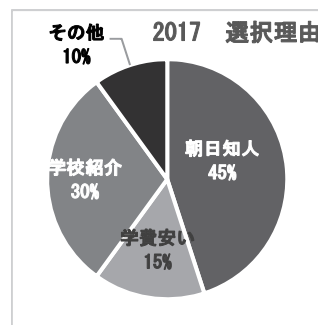


図 12 朝日大学選択理由

「進路希望」に関しても、3年前より「朝日大学進学」が明確になっている。もちろん3年前は調査時期が早かったため、迷っている学生もカウントされているが、2017年度の調査では半数以上が朝日大学進学を希望している。(調査の段階で既に10名近くの学生は出願済みであった。)

つまり、朝日大学留学生別科あるいは朝日大学に在籍していた兄弟や親せきの話を聞いて来日し進路を決めているのである。親戚や家族がいることで、外国での不便な生活に対する不安は軽減され、日本語が十分でなくても大学の情報を簡単に手に入れられたのである。これ

は、ある種の「口コミによるリピーター」ではないかと考える。在籍していた学生、先輩たちが、ある程度環境に満足していたため、親戚や知人に紹介したということである。

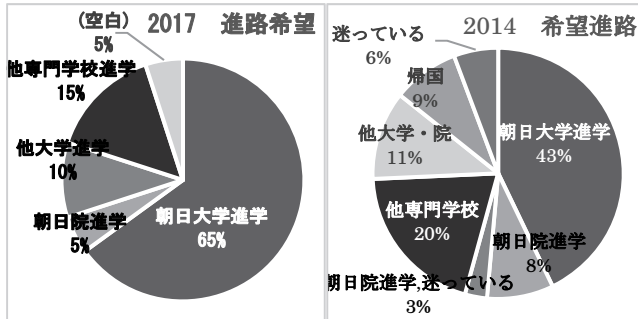


図 1.3 進路希望 (比較)

もちろん先輩たちが「何」に満足していたかは不明であるが、先輩たちの教えどおりに、なるべく休まずに出席し、日本語を学習し、アルバイトを選び、日本で生活をして、朝日大学に進学する。その様子から見ると、ある種の「正の循環」が生まれているように思われる。

4. まとめ

この調査結果は朝日大学留学生別科の全てではない。だが、限定されたデータの中で見えたことは、家族や親戚、推薦機関の先輩からの影響、つまり朝日大学留学生別科の修了生の存在が大きいということである。先輩たちの話をもとに、朝日大学留学生別科を選び来日し、日本語を学びアルバイトをこなし、朝日大学に進学する。その流れとともに、住まいやアルバイトなどの生活情報を同国人と共有し、互助的な関係を築きながらさらに広がり続ける。地方都市における留学生ネットワークは、家族や親戚等の非常に限定的な関係であるが、まだまだ広がっていくと思われる。

今後の課題は、留学生たちの大学卒業後の進路先が大きな鍵になると思われる。別科修了生の多くは朝日大学に進学しているが、その学部生たちが卒業期を迎える。つまり、学部生の卒業後の進路が、今後の朝日大学留学生別科の動向に大きく影響することが考えられる。特に日本で就職した先輩たちの情報が増えるに従い、朝日大学周辺の限定的なネットワークは新たな局面を迎えると思われる。そのためにも、留学生別科と大学学部との縦断的な調査や事態の把握も今後、望まれる。

今回、あえて回答数別のグラフを避けたのは、数よりも全体の割合を見たかったからである。また、今回の調査でもベトナム人留学生に特化したのが、実際のアンケートは少数ではあるが、ベトナム以外の国籍の学生もアンケートに答えてくれている。だが、サンプル数が少ないと個人を特定される危険性があるため、今回はあえて言及しなかった。

このような調査に何の意味があるのかと問われるかもしれない。ただ現場で聞こえる学生の声をできるだけ拾うことに一つの意味があるのではないかと考える。実際、現場やSNS上で学生の本音が見え隠れする。それを晒すのではなく、一つ一つ記録し続け、調査を重ねることで、朝日大学留学生別科が持つ特徴や、学生たち全体の経年変化が見られる可能性に期待している。また経年調査を積み重ねることにより回答者の特定も薄れていく。

今後は、毎年別科生全員に調査を行い、学生の動向を観察し続け、学生の声を拾いながら、指導や教育サービスの参考にできればと考えている。そのためにも今回は一つの調査方法としてまとめた。